

FORUM

第50回日本てんかん学会学術集会 シンポジウム関連講演「てんかんと 雇用」(Rupprecht Thorbecke 先生) 聴講記

中岡健太郎

国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター精神科

2016年10月9日

グランシップ 静岡県コンベンションアーツセンター

2016年10月9日、第50回日本てんかん学会学術総会(静岡)で行われたRupprecht Thorbecke先生によるてんかんと雇用についての講演を拝聴する機会に恵まれた。Thorbecke先生は、ドイツのベートルてんかんセンターでリハビリテーション部長として長年勤務された後、現在は同センターのてんかん研究協会に所属し、てんかん患者のリハビリテーションや雇用について数々の実践・研究発表をしてこられた、この分野におけるスペシャリストである。一聴講者としてここに講演のまとめを記した。

はじめに

ベートルてんかんセンターについて紹介の後、生活の質(QOL)と雇用のかかわりについて文献レビューを交えながら説明された。発作消失の可能性がある場合、発作頻度はQOLを規定する大きな要因だが、いっ

たん発作消失したり、逆に薬物抵抗性が明らかになると、薬物の有効性・忍容性、抑うつや不安などの精神医学的合併症、そして雇用がQOLによりかかわってくる。

ドイツのてんかんセンターでの研究では、てんかんのある人が雇用機会を失うことで直接コスト(医療費)および間接コスト(病休や障害年金)が増すが、この割合は新規発症例や発作が抑制されていない人では同等であり、発作が抑制された人の割合が増えるほど、間接コストの占める割合が増すことが示されている(表1)。

てんかんと雇用に関する研究は、雇用機会にネガティブな影響を与える因子に焦点を当てた研究がほとんどを占め、どうやって雇用機会を生み出せばよいかを示す介入研究や社会政策レベルで提供されるべき社会的サポートの形態をみた研究は不足しているのが現